

青葉遺跡 1

—青葉遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1406集

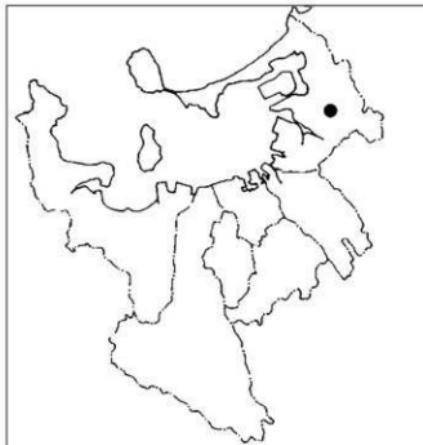
2021

福岡市教育委員会

青葉遺跡 1

— 青葉遺跡第1次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1406集



遺跡略号 AOB - 1

調査番号 1811

2021

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄界灘を介して大陸・朝鮮半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は青葉土地区画整理事業に伴う青葉遺跡第1次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代～中世の遺構・遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のために重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社みなもと都市設計様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　　言

- 本書は、福岡市教育委員会が青葉地区画整理事業に伴い、福岡市東区青葉1丁目307-1、307-3、317において発掘調査を実施した青葉遺跡第1次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、民間受託事業として実施した。
- 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は、清金良太が行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金・平川敬治が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、清金が行った。
- 本書に掲載した挿図の製図は、清金が行った。
- 本書に掲載した国土座標値は、世界測地系（第II座標系）によるものである。
- 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ} 18'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
- 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆および編集は、清金が行った。

遺跡名	青葉遺跡	調査次数	第1次	遺跡略号	AOB-1
調査番号	1811	分布地図図幅名	八田	遺跡登録番号	2618
申請面積	21,978m ²	調査対象面積	640.2m ²	調査面積	338.4m ²
調査地	福岡市東区青葉1丁目307-1、307-3、317			事前審査番号	29-1-20
調査期間	2018年6月25日～9月25日				

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 概要	5
2. 遺構と遺物	5
I区 1) 構 (SA)	5
2) 竪穴住居 (SC)	5
3) 溝 (SD)	8
4) 土坑 (SK)	9
5) その他の遺物	12
II区 6) 竪穴住居 (SC)	16
7) 土坑 (SK)	16
3. 結語	16

挿図目次

第1図 青葉遺跡位置図 (1/25,000)	3
第2図 調査区周辺図 (1/2,000)	4
第3図 I区全体図 (1/100)	6
第4図 SA080 実測図 (1/80)	7
第5図 SC009 実測図 (1/60)	7
第6図 SC009 出土遺物実測図 (10・11は1/1ほかは1/3)	8
第7図 SD001・011・061・062 実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)	9
第8図 SK058 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)	10
第9図 SK060 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 1 (1/3)	10
第10図 SK060 出土遺物実測図 2 (1/3)	11
第11図 ピット出土遺物実測図 (1/3)	12
第12図 包含層出土遺物実測図 (35は1/2、43・44は1/1、ほかは1/3)	12
第13図 II区全体図 (1/100)	13
第14図 SC106・107 実測図 (1/80) および SC107 出土遺物実測図 (1/3)	14
第15図 SC109 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (56は1/4、他は1/3)	15
第16図 SK108 実測 (1/60) および出土遺物実測図 (1/1)	15

図版目次

- 図 版1 (1) I区北側全景（東から）
(2) I区南側全景（北から）
(3) SD001 土層断面（東から）
- 図 版2 (1) SK060（北から）
(2) SP064（西から）
(3) II区全景（北から）
- 図 版3 (1) II区全景（南から）
(2) SC107（東から）
(3) SC109（西から）
- 図 版4 出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市東区青葉1丁目307-1、307-3、317の一部における土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成29年6月5日付で受理した。

これを受けた埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である青葉遺跡に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下約40~65cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、土地区画整理事業で遺跡が破壊される部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成30年6月22日付で株式会社 みなもと都市設計を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年6月25日から発掘調査を、令和元年度に資料整理、令和2年度に報告書作成をおこなうこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社 みなもと都市設計

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：平成30年度・資料整理：令和元年度・報告書作成：令和2年度)

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課 課長 大庭 康時(30年度)

菅波 正人(元年・2年度)

同課調査第2係長 大塚 紀宜(30年度)

同課調査第1係長 吉武 学(元年度)

同課調査第2係長 藏富士 寛(2年度)

庶務： 文化財活用課管理調整係 松原加奈枝

事前審査： 埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎

同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎

同課事前審査係文化財主事 朝岡 俊也(30・元年度)

山本 晃平(2年度)

調査担当： 埋蔵文化財課文化財主事 清金 良太

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について株式会社 みなもと都市設計様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によつて画される中小の平野が展開しており、東側から柏屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する青葉遺跡が所在する青葉付近は、柏屋平野の北東側に位置し城之越山より派生する丘陵上に立地している。青葉遺跡は第三紀層風化土が地山となる。発掘調査の事例はなく、今回の調査報告が初めてである。丘陵頂部から天気が良ければ博多湾が見え、またJR香椎線の列車が、すぐ南西側を走る。

旧石器時代では香椎A遺跡の6・7次調査から三陵尖頭器、ナイフ形石器、彫器などが出土している。柏屋平野内では縄文時代晩期末には江辺遺跡で農耕集落が営まれている。また、香椎A遺跡の6次調査では谷部の流路下層から縄文時代晩期前半を主体とする土器が出土した。

弥生時代には蒲田部木原遺跡と蒲田水ヶ元遺跡で弥生時代中期から終末期の堅穴住居を中心とした集落跡や甕棺墓、また環濠内掘立柱遺構からは弥生時代後期中葉から終末期の土器が環濠内で検出され、高床式建物と環濠から収穫物の貯蔵用倉庫とされている。青銅器鋳型も多く見つかり、多々良大牟田遺跡では有鉤銅鏡と広型銅戈の鋳型、土井遺跡では中細銅戈と中広銅劍の鋳型が発見されている。そのほか、八田出土と伝わる中細銅戈の鋳型がある。また顕孝寺遺跡では甕棺から銅劍が出土している。

弥生時代終末から古墳時代初頭には、多々良川左岸の多々良込田遺跡で外來系土器を多数もつ集落が営まれる。また、砂丘上に位置する唐の原遺跡では漁撈関連遺物を出土する集落と畑跡が多数検出された。多々良戸込田遺跡では井堰が出土している。

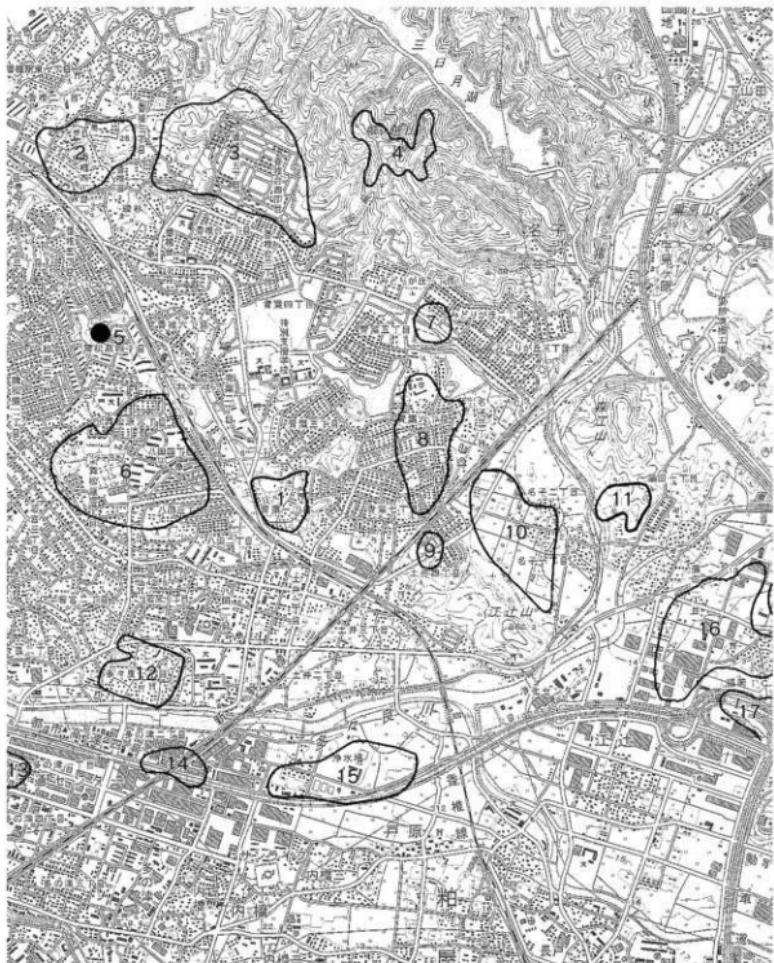
古墳時代は多々良川河口近くの右岸丘陵上に名島古墳が築かれる。全長約30mの前方後円墳で三角縁九神三獸鏡と鉄劍が出土している。猪野川左岸の丘陵上にある天神森古墳からは三角縁三神三獸鏡と、小型の盤龍鏡が出土している。また、香住ヶ丘古墳からは三角縁二神二獸鏡が出土しており、古墳時代前期に大きな勢力を持った集団がいたことが伺える。4世紀末には舞松原古墳が造出付円墳として築かれ、主体部は木棺直葬である。中期の古墳は無く後期になると唐の原遺跡で円墳が築かれる。

蒲田部木原遺跡では古墳時代中期から後期の堅穴住居が検出され、堅穴住居には竈がみられる。蒲田水ヶ元遺跡では古墳時代前期から中期の堅穴住居が検出されている。

『日本書記』卷8 仲哀天皇 9年2月条には熊襲平定の際に行宮「櫛日宮」が置かれ、仲哀天皇が新羅征討の神託にそむいたためその行宮で亡くなったことが記されている。また、『日本書記』卷九攝政前期には神功皇后が新羅征討に先立ち、「櫛日浦」の海水で髪をすすぎ、みずらに結ったことが記されている。

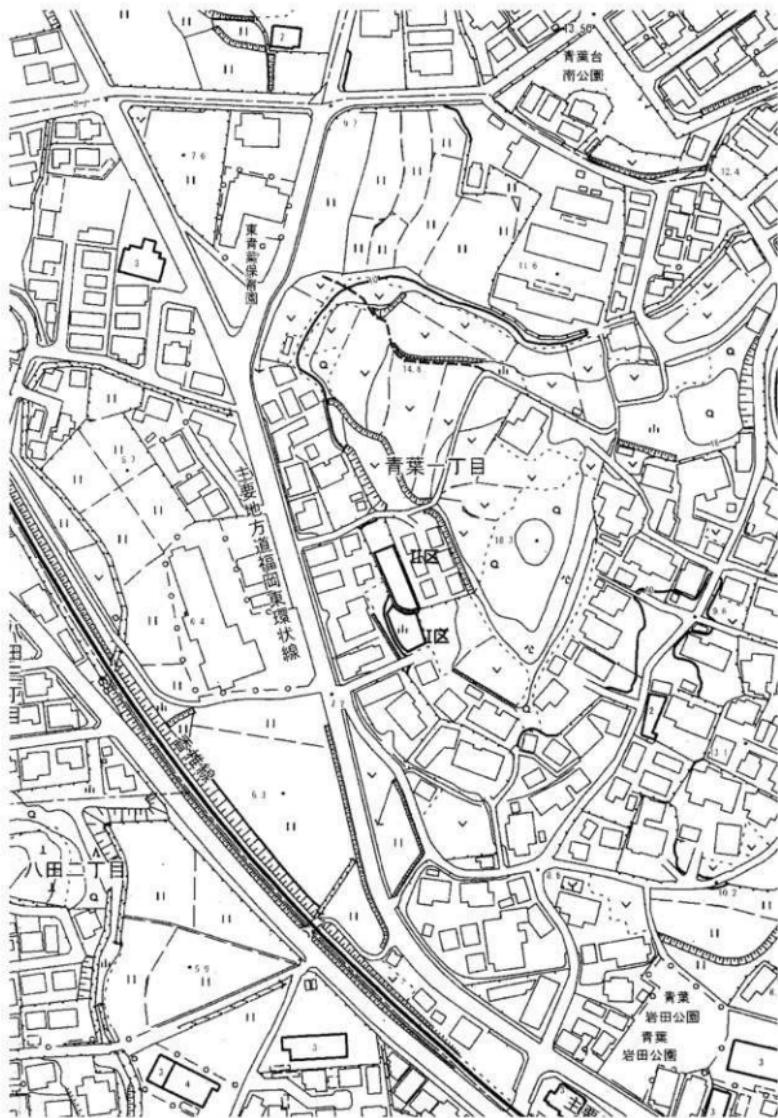
香椎宮が創建された古代では、多々良込田遺跡で越州窯系青磁や三彩水注、硯、墨書き土器、石帶、鈴などが出土し、官衙を想定させる遺物が出土しており注目される。また砂丘上に立地する海の中道遺跡では製塙土器、土鍤・釣り針などの漁撈具、越州窯系青磁、袴帶、皇朝十二錢のうち4種類が出土しており、大宰府の出先機関である「津の御厨」との関連が指摘されている。

中世においては、多々良遺跡で、輸入陶磁器や在地の土師器が出土し、方形区画溝を持つ集落が検出された。麦尾戸原遺跡では12世紀から14世紀の方形区画溝を持つ屋敷地や水田址が発掘された。香椎A遺跡3次調査では11世紀から13世紀にかけての屋敷群が検出された。また、香椎B遺跡では10世紀から15世紀にかけての屋敷群が出土しており3次調査との関連性が指摘されている。



- 1 青葉遺跡 2 香椎 A 遺跡 3 香椎 B 遺跡 4 御飯の山城跡 5 舞松原古墳
6 多々良大牟田遺跡 7 湯ヶ浦古墳群 A 群 8 土井遺跡 9 名子道古墳群
10 名子遺跡 11 森江山古墳群 12 顯孝寺遺跡 13 多々良遺跡 14 多々良込田遺跡
15 戸原麦尾遺跡 16 蒲田部木原遺跡 17 かけ塚遺跡

第1図 青葉遺跡位置図(1/25,000)



第2図 調査区周辺図 (1/2,000)

III. 調査の記録

1. 概要

今回報告する青葉遺跡第1次調査区は、福岡市東区青葉1丁目307-1、307-3、317の一部に所在し、調査前の現況はI区が標高約12.2m、II区が13.1mを測る平地であった。調査地点は遺跡の西部に位置し、今回が青葉遺跡では初めての調査であった。

「II. 遺跡の立地と環境」でも触れたように本調査区は東から西へ下る丘陵上に位置する。本調査区は表土および客土のほぼ直下に花崗岩風化層に起因する遺構面があり、北側（II区）が一段高く、I区とII区の間に段差を伴いながら南西側に向かって傾斜する。周囲も段々となっており、段造成されたことが伺える。I・II区共に、赤～黄褐色を呈する花崗岩の風化した粘性土が遺構面となる。遺構面の標高はI区の北東側で11.89m、南西側では10.50m。II区で13.01mを測る。

遺構検出は遺構面上までを重機で剥ぎ取って実施し、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、古墳時代の堅穴住居、溝、土坑、を主体として確認できたが、古代のピットや中世の溝も散見する。出土遺物量は、コンテナケースにして22箱である。

発掘調査は2018年7月25日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後、外構設置や壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、28日からI区の遺構検出を開始した。包含層の土量ができることから、北側の掘削、写真撮影を終わらせた後、順次、南側から包含層の掘削、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した8月27日に全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影を終え、9月3日からII区の調査を開始した。検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した9月14日に全体写真撮影を行い、その後残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、9月25日に第1次調査を完了した。

調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や堅穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にP-1から順に番号を付した。

2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、I・II区共に調査時における世界測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA～D）と数字（北から南に1～5）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第4、14図参照）。

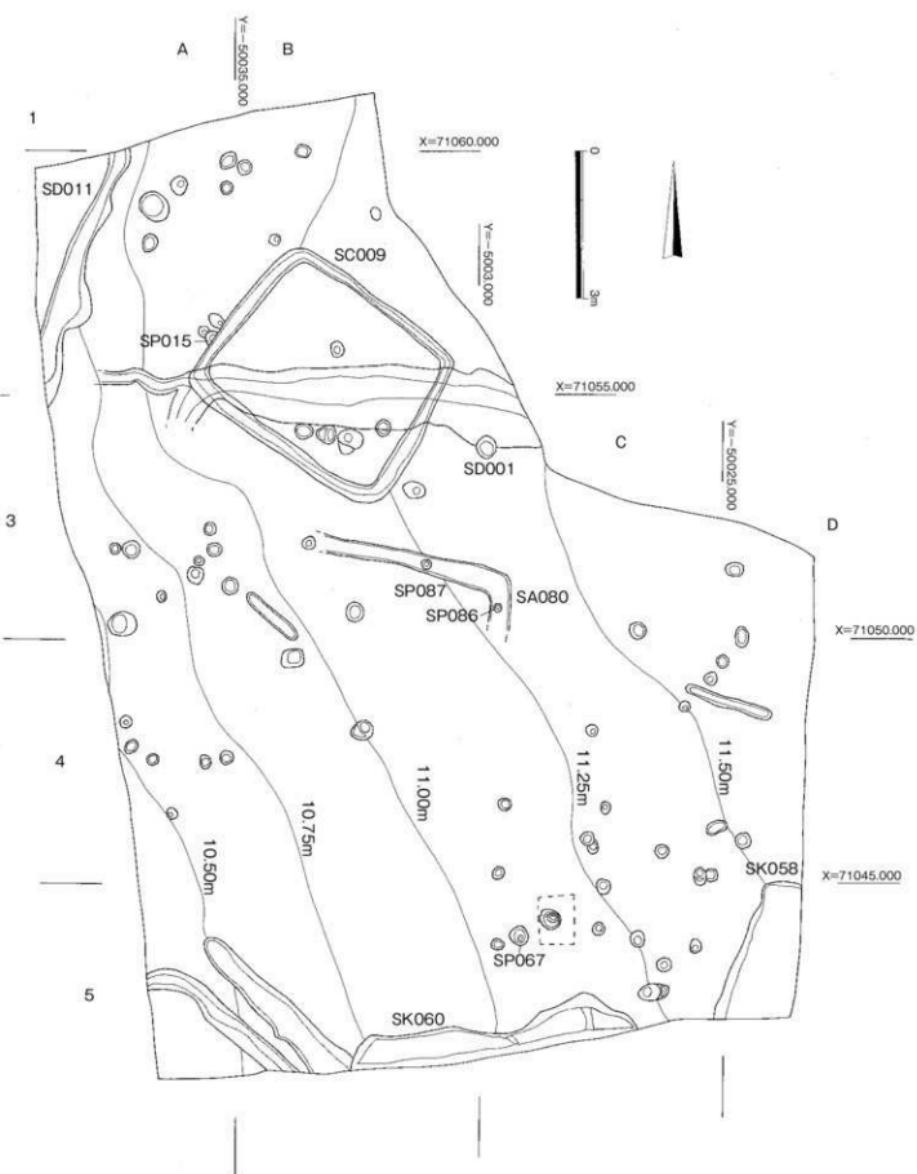
I区

1) 構 (SA)

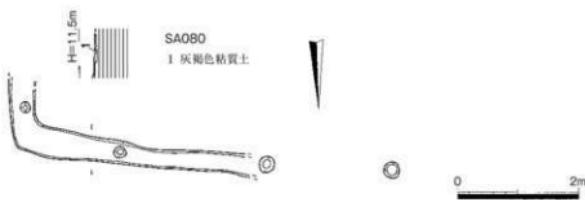
SA080（第4、5図）I区中央のABC-3に位置し、北東側の隅が残る。それ以外の箇所は削られており残っていなかった。柱間は約2.1mを測る。柱穴は約0.6mの円形を呈し、深さ約0.2mを測る。P 086-087から磁器片が出土しており、中世以降の所産と考えられるが図化はできなかった。

2) 堅穴住居 (SC)

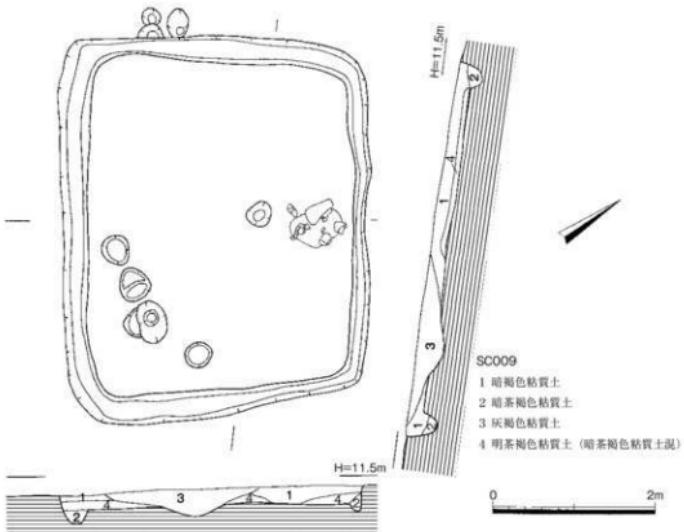
堅穴住居はI区で1軒を確認することができた。



第3図 I区全体図 (1/100)



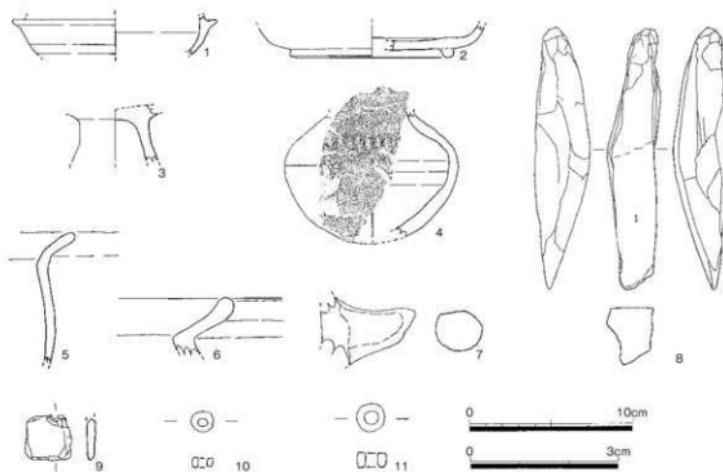
第4図 SA080 実測図 (1/80)



第5図 SC009 実測図 (1/60)

SC009（第4、6図）I区北側のA B - 2. 3に位置する。SD001との切合いから先行する。西-南東方向の長さは約4.6m、北東-南西方向では4.2mを測り、北東-南西方向にやや長い長方形プランを呈する。各コーナーは隅丸状にカーブする。壁面の高さは0.2m程度で、削平がおよぶ。土層観察では明瞭な貼床は確認できなかった。床面では全ての壁面に沿って、幅0.12～0.28m、深さ0.1～0.19mの壁溝が設けられる。また、北東側の一部では焼土や炭化物を含み、周間に焼土が散在する状況が認められたことから、屋内炉と考えられる。床面では他に多数の円形もしくは稍円形のピットを検出したが、主柱穴は明らかではない。

出土遺物（第7図）1～4は須恵器である。1は最大径約12.4cmの壺身である。口縁部と底部が欠



第6図 SC009出土遺物実測図(10・11は1/1ほかは1/3)

損する。2は底径約10.0cmの壺身で高台が付く。3は高壺、4は竈であるが、両者と共に破片である。5・6は弥生土器の壺で、口縁部から胴部周辺が残る。7は土師器である。瓶の把手のみが残る。8～10は石製品である。8は安山岩の砥石で、長さ16.0cm、重さ151.17gを計測する。9は粘板岩の石包丁であろうか。欠損が著しいが紐を通して孔が確認できる。10・11は滑石製の臼玉である。10は厚さ0.3cm、径0.6cm、11は厚さ0.2cm、径0.45cmである。

3) 溝 (SD)

SD001 (第4、8図) I区中央のA B C - 2, 3で検出した。東西方向に走る溝でSC009を切る。最大幅は約12mで深さ約0.2mである。時期は中世の磁器が出土したが、細片であり図化はしていない。

SD011 (第4、8図) I区北西側のA - 1, 2で検出した。南北方向に走る溝で覆土は明灰褐色粘質土である。幅は約0.24～0.62m、約深さ0.16mを測る。時期は近世。

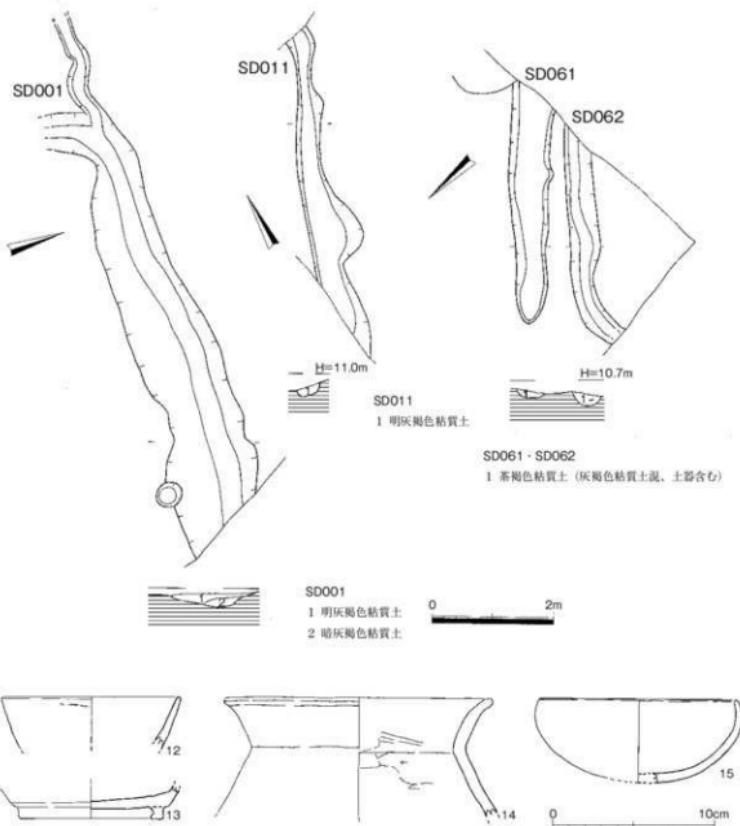
出土遺物 (第8図) 12は肥前系陶器の碗で、口径約10.6cmが残る。13は壺身で底径は8.8cmを測る。

SD061 (第4、8図) I区南西のA - 5で検出した。覆土は茶褐色粘質土で幅約0.24m、深さ約0.11mである。6世紀後葉。

出土遺物 (第8図) 14は土師器の壺で、口径は約16.4cmである。外面は器壁が荒れ定かではないが、内面頸部にはハケ目、胴部にはヘラ削りが確認できる。

SD062 (第4、8図) I区南西のA - 5で検出した。SD061と平行に走り、覆土は茶褐色粘質土で、幅は約0.22m以上、深さ0.4mであった。覆土、平行に走ることから元々は一つの溝であった可能性もある。

出土遺物 (第8図) 15は土師器の鉢で口径12cm、高さ約5.2cmが残る。外面は器壁が荒れ調整は不明であるが、内面はナデが確認できる。



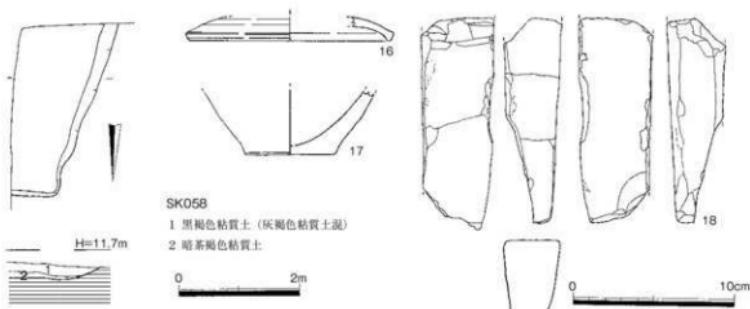
第7図 SD001・011・061・062実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

4) 土坑 (SK)

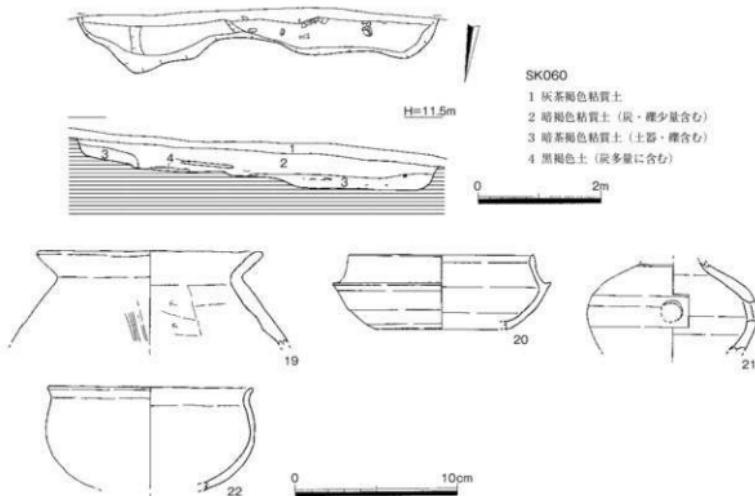
SK058 (第4、9図) I区南東のD-5で検出した、深さ23.0cmの土坑である。一部しか検出されておらず、堅穴住居の可能性も考えられたが、青葉第1次調査ではI・II区共に全て壁溝を伴う堅穴住居であり、SK058では壁溝は確認できなかったので土坑であると判断した。

出土遺物 (第9図) 16は須恵器の壺蓋で、口径は約12.6cmである。17は弥生土器の壺で、底径約5.4cmが残る。18は貝岩の砥石である。長さ12.5cm、幅3.5cm、厚さ4.5cm、重さ290.1gである。石斧から砥石に転用したものか。

SK060 (第4、10図) I区南のB C - 5で検出した。深さ0.24~0.58mの土坑である。調査区内には一部しかかかっておらず、大半は隣の敷地内に伸びる。東から西に向かってに段状に下る。

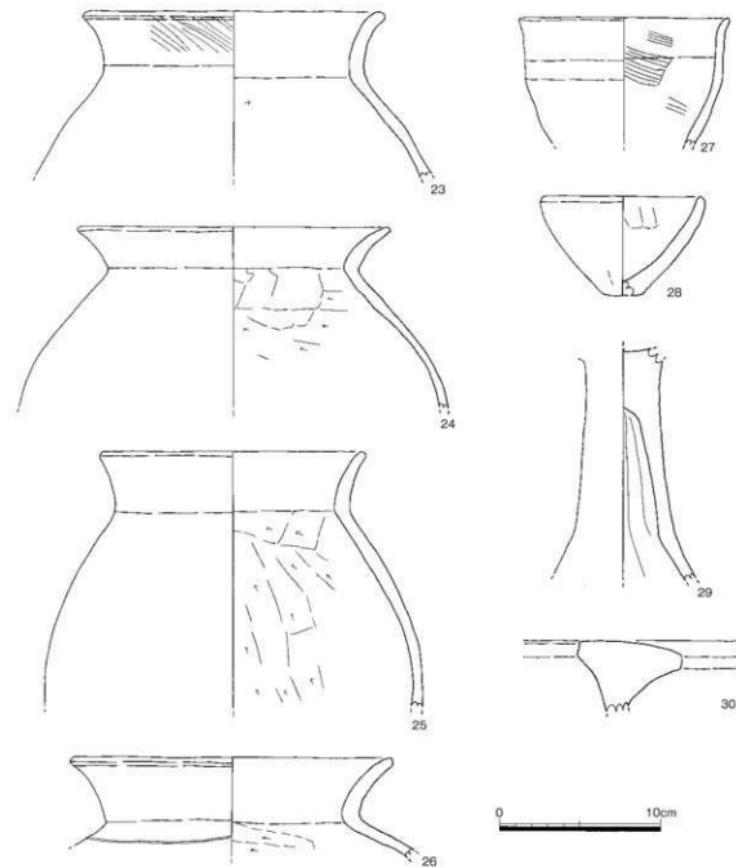


第8図 SK058 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)



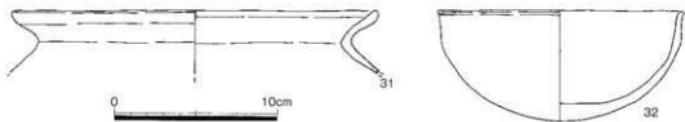
第9図 SK060 実測図 (1/80) および出土遺物実測図 1 (1/3)

出土遺物（第10、11図）19～21は上層での検出である。19は土師器の壺である。口径約13.8cmが残る。外面はハケ目調整、内面の頸部から下ではヘラ削りが確認できる。20、21は須恵器である。20は坏身で最大径約13.2cmが残る。調整は回転ナデである。21は甌で、胴部の復元口径は約10.4cmである。調整は回転ナデで胴部中央に穴を穿つ。22から29まで、土師器であり下層から出土が確認された。22は鉢である。口径約12.4cmが残る。器壁が摩滅しており調整は不明である。23から26は壺である。23は口径約18.4cmが残る。外面の口縁部から頸部にかけて叩きの痕跡が確認できる。

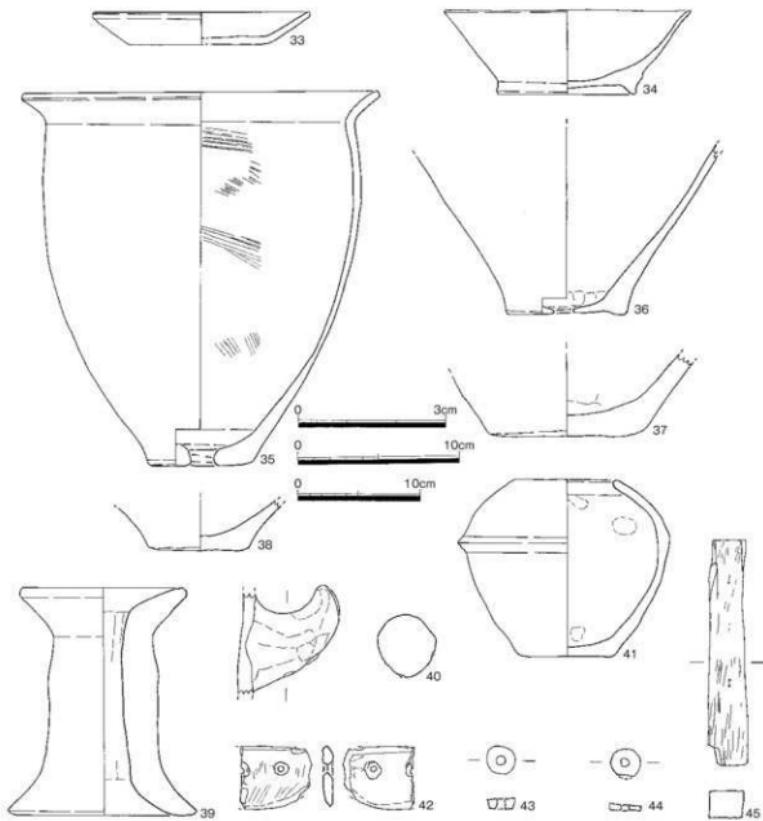


第10図 SK060出土遺物実測図2(1/3)

内面はヘラ削りの後、頸部付近に指おさえの痕跡が残る。24は口径約19.0cmが残る。調整は内面の口縁部から頸部はナデ、胴部にヘラ削りが確認できる。25は口径約16.2cmである。調整は外側の口縁部から頸部までナデ、また内面の口縁部から頸部までヘラナデ調整、胴部はヘラ削りの痕跡が残る。26は口径19.6cmである。外側口縁部から頸部にかけてハケ目調整、内面は頸部から胴部にかけてヘラ削りが確認できる。27、28は鉢である。27は口径約12.8cmで、外側は器壁が剥落し調整は不明であるが、内面にはハケ目が確認できる。外側の稜線はシャープさに欠ける。28は口径約10.0cm、高さ6.0cmで、内面はヘラ削りで調整している。29は高壺の脚部である。壺部と底部を欠損する。30は弥生土器の壺棺片である。口縁部の一部が残る。



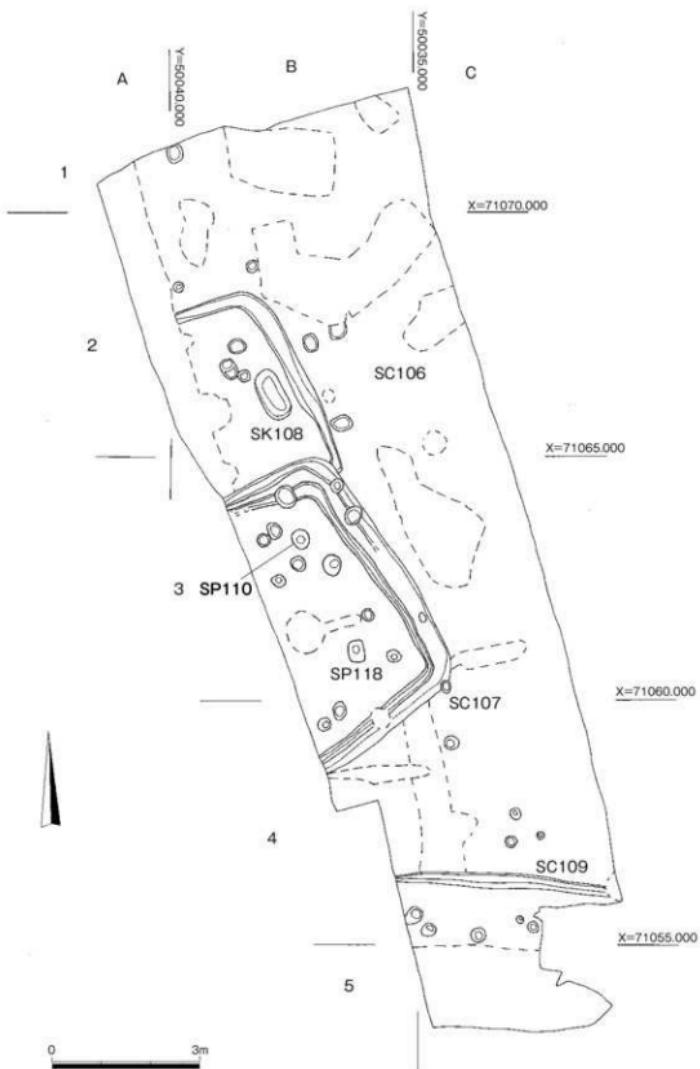
第11図 ピット出土遺物実測図(1/3)



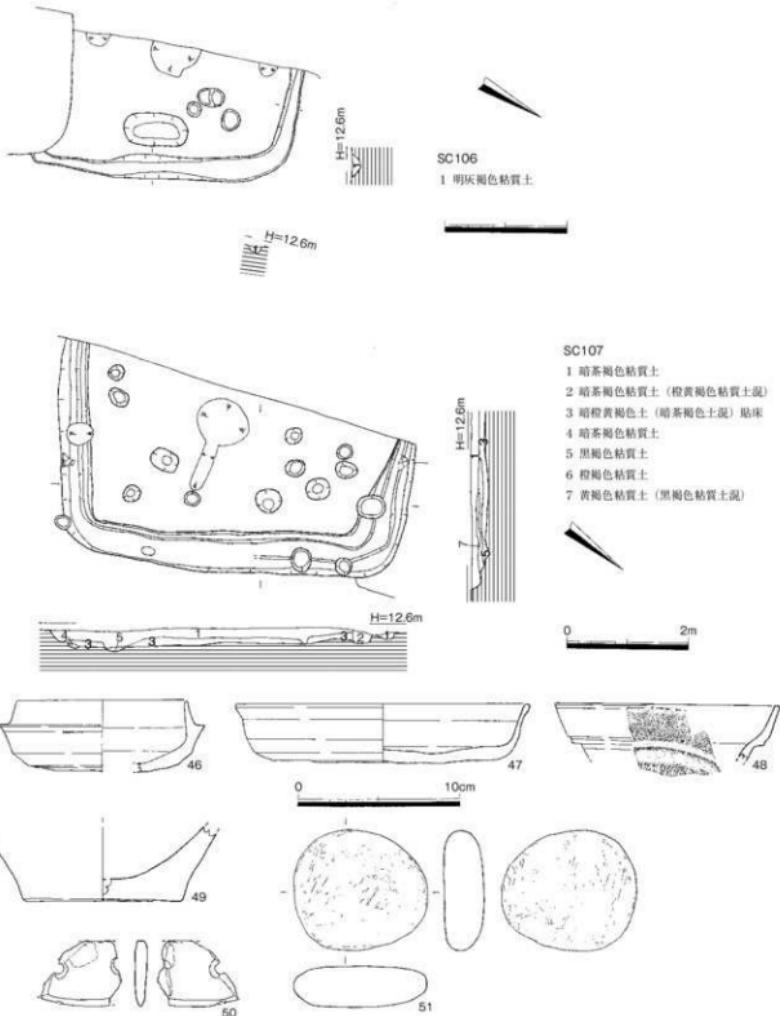
第12図 包含層出土遺物実測図(35は1/2、43・44は1/1、ほかは1/3)

5) その他の遺物

1区のA-2で検出したSP015、C-5で検出したSP067から出土した遺物を取り上げる(第4図)。出土遺物(第12図)31、32は土師器である。31は壺で、口径は約22.4cmが残る。32は鉢ではぼ

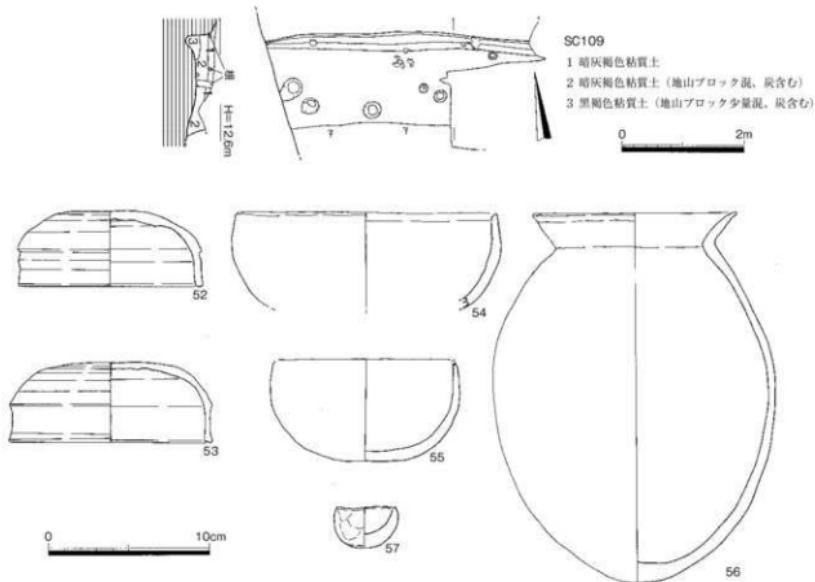


第13図 II区全体図 (1/100)

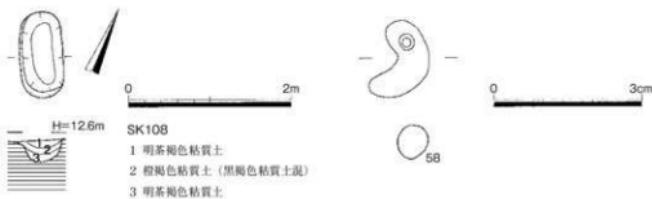


第14図 SC106・107 実測図 (1/80) よび SC107 出土遺物実測図 (1/3)
完形である。口径 14.9cm、高さ 6.8cm である。

包含層からは I 区の南側を中心に遺物が出土しており、図化できたものを取り上げた。(第13図)
33、34は土師器である。33は壊で口径 13.2cm、高さ 2.0cm である。器面は剥落が激しい。34は高台



第15図 SC109 実測図(1/80)および出土遺物実測図(56は1/4、他は1/3)



第16図 SK108 実測(1/60)および出土遺物実測図(1/1)

付の坏で口径約15.0cm、高さ5.1cm、調整は回転ヘラ削りである。35～41は弥生土器である。35～38は甕で、35は口径29.1cm、高さ約30.4cmで外面は剥落しており調整は不明。内面はハケ目が確認できる。また、底部には焼成後の穿孔がみられる。36は底部に焼成後の穿孔が確認できる。39は器台で高さは13.8cmで、器壁は剥落が激しい。41は壺で胴部に突帯がつく。口径約6.0cm、底径5.4cm、高さ10.8cmを測り、器壁は剥落が激しく調整は不明である。42は凝灰岩の石包丁である。43、44は滑石製の臼玉で43は厚さ2～2.5mm、幅6.0mmである。44は厚さ1～1.5mm、幅7.0mmである。45は頁岩の砥石で重さ1129gが残る。

II区

II区ではI区で検出されたような包含層は無く表土直下で遺構が確認された。また、北側は遺構が

無く、搅乱・段造成によって削られていた。

6) 壺穴住居 (SC)

II区では3軒の壺穴住居を検出した。

SC106 (第14、15図) II区のAB-1、2で検出した。大部分を搅乱、SC107に切られる。覆土は明茶褐色粘質土の壺溝のみ残っており、深さ11~18cmであった。主柱穴は確認できず、また遺物は極小片のみで図化できなかった。須恵器片が出土した。

SC107 (第14、15図) II区のB-3、4で検出した。一部SC106を切り、壺穴住居の約半分ほどが段造成により削平を受ける。1辺の長さは5.64m、4本柱(SP110,118)の壺穴住居で柱間は2.50mであった。床面は貼床が確認でき、壁面の高さは0.28~0.34mが残る。壺溝は一部二重に確認でき、深さは0.04、0.08mである。建て直しがあったのかどうかは不明である。

出土遺物 (第15図) 46~48は須恵器である。46は壺身で口径約12.4cmである。口縁部内側に稜線は無く、やや丸みを持って仕上げる。47は皿で口径約17.8cm、高さ3.6cmを測る。口縁部はやや外反する。48は翫の口縁部である。49は弥生土器の甕で、底径は約9.8cmである。50は凝灰岩製の石包丁である。51は安山岩製の敲き石で重さ242.84gを測る。

SC109 (第14、16図) II区のBC-4、5で検出した。ほとんどを搅乱・木の根で破壊されており、掘れなかった。一部分しか確認できなかったが、壁が垂直に立ち上がり、壺溝が確認できたので壺穴住居とした。床面までの高さは約0.25m、壺溝は幅0.34m、深さ0.16mであった。土層観察では明瞭な貼床は確認できなかった。一部被熱を受けた痕跡を確認した。

出土遺物 (第16図) 52、53は須恵器である。52は口径11.2cm、高さ4.6cmで、外面の稜線はしっかり残る。口縁部は段状になる。53は口径12.4cm、高さ4.9cmで、外面の稜線はややあいまいな表現である。54~56は土師器である。54は鉢で口径約15.8cmを測る。55は鉢で口径約11.0cm、高さ6.1cmを測る。56は甕で口径16.7cm、高さ30.2cm、外面の器縁は剥落しているが、内面はヘラ削りで仕上げる。57は手づくね土器で口径3.9cm、高さ2.5cmを測る。

7) 土坑 (SK)

SK108 (第14、17図) II区のB-2で検出した。長さ1.05m、幅0.55m、深さ0.27mを測る。勾玉のみが出土したので詳しい年代は不明である。また掘削中の堆土を捨てようとした土の中から勾玉が見つかったので出土位置は図中に落とせなかった。

出土遺物 (第17図) 蛇紋岩製の勾玉である。長さ1.5cm、厚さ0.7cmである。

3. 結語

青葉第1次調査ではI・II区で合計4棟(SC009、106、107、109)の壺穴住居址を確認した。結語ではその年代に触れない。

SC009は弥生土器から古代の須恵器まで幅広い時期の土器が出土しているが、I区は包含層に覆われており包含層から弥生土器と古代の時期と考えられる遺物が出土している。SC009では弥生土器が2点、古代の土器が1点、そのほかは全て6世紀中頃~後半の年代があてられる。SC106、107であるがSC107がSC106を切っており新しい。SC107、109の遺物を見るとここにも弥生時代、古代の土器が混ざっているが年代の中心は6世紀中頃~後半の年代があてられる。II区で包含層は検出されていないが、古代以降の土地の改変により消滅したものと考えている。

青葉遺跡での初めての発掘調査であった。包含層にも弥生から古代までの遺物を含み、その中でも甕棺片が何点か混じっていた。山裾のあたりではまだ、遺跡が残っている可能性が高い。



(1) I区北側全景（東から）



(2) I区南側全景（北から）



(3) SD001 土層断面（東から）

図 版2



(1) SK060 (北から)



(2) SP064 (西から)



(3) II区全景 (北から)



(1) II区全景（南から）



(2) SC107（東から）



(3) SC109（西から）

図 版4

出土遺物



報 告 書 抄 錄

青葉遺跡 1

—青葉遺跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1406集

2021年（令和3年）3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 國崎美峰堂
福岡市東区箱崎1丁目20-5

